研究ノート

一七六四年の朝鮮通信使からみる庶孼文人
――「蒹葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊――

鄭　敬珍

はじめに

一六〇七年から一八一一年の約二百年の間、十二回にわたり日本に来聘した朝鮮通信使行のうち、一七六四年の朝鮮通信使行は、江戸まで辿りついた最後の使行であった[1]。使行のすべてを尽くしたと評価されるほど、苦難に満ちた使行であったが[2]、日本人との詩文や筆談の唱和が最も活発に行われたという点において、この使行の持つ文化交流の成果は重要であった、と考えられる。朴賛基は、一七六四年の通信使行は両国の交流と日本の人々の対朝鮮観のあり方を探る上で一つの転換期になったと分析している[3]。その中でも注目すべき出来事に、朝鮮の製述官や書記と、大坂を代表する文人・木村蒹葭堂をはじめとする蒹葭堂会の人々の交遊がある。この交遊については、すでに高橋博巳によって多々論じられてきた。高橋は論考の中で、通信使の帰国後、顔を合わせたことのない朝鮮の実学者たちが、蒹葭堂会の人々について評価をしたことに注目している[4]。この朝鮮の実学者たちは、中国の先進文明を積極的に受容する「北学」を振りかざしたことから「北学派」とも呼ばれた人々であった。その代表的な人物に、朴趾源（パクジウォン）（一七三七～一八〇五）や朴齊家（パクジェガ）（一七五〇～一八〇五）、李徳懋（イドクム）（一七四一～一七九三）、洪大容（ホンデヨン）（一七三一～一七八三）などがいるが、とりわけ、李徳懋と洪大容は、一七六四年の書記である成大中や元重擧と親交があった[5]。高橋は、李徳懋らが蒹葭堂会に共感した「風流文雅」は、朝鮮と日本の隔たりを超えたものであると指摘し

た。さらに、中国に使節団として派遣された洪大容らによって、兼葭堂たちの詩文が中国に伝わったことを踏まえ、この一連の交遊を「東アジアの文芸共和国」の形成と定義している。[6]

確かに朝鮮通信使と大坂の文人たちの交遊は、従来の通信使行では例を見ない出来事であり、交遊を通して制作されたとされる「兼葭雅集図」が海を渡り、後に朝鮮の実学者らによって大いに評価されたことなどを考えると、高橋の論考は妥当といえる。だが、高橋の定義は、交遊に参加した朝鮮側の当事者に焦点を当てているとは言いがたく、海を越えこの交遊を評価した李徳懋、洪大容らを射程にしていると言わざるを得ない。これに対し、本稿は、この交遊の当事者に注目し、どのような背景や理由によって一七六四年の交遊が行われたのかを明らかにすることを目的とする。なぜなら、交遊に参加した朝鮮側の人物の面々や彼らが朝鮮通信使として派遣される前、朝鮮社会においてどのような生き方をしていたのか、彼らの身分を含む社会的位置づけについては、これまでの日本の研究分野では、ほとんど注目されてこなかったからである。[7]それに加え、朝鮮側の製述官や書記がいかにして、李徳懋や洪大容らの北学派の実学者たちと関わりを持っていたのかについても注目する必要がある。最終的には、朝鮮側の人物の「文人」志向について考察を加え、一七六四年の大坂での交遊を可能にした、背景について考察していきたい。

その前提として、まず、双方の「文人」志向について、明らかにする必要があるだろう。周知のように、兼葭堂会は、木村兼葭堂を中心とし、彼の書斎である兼葭堂に様々な層の「文人」が集い、大坂を代表する詩社となった。[8]一方で、朝鮮側の人々を考えてみると、使行中に呼ばれた「製述官」や「書記」とは臨時の役名に過ぎない。したがって、使行に参加する前、彼らが朝鮮社会においてどのような生活を送っていたのかを明らかにすることが重要な鍵になる。さらに、「兼葭雅集図」の制作過程についても再考察の余地があると思われる。[9]以上のように、本稿では、先行研究の成果を踏まえながら、朝鮮側の視点によって、考察を進めることにする。

このような問題関心のもと、第一章では、製述官や書記、高橋の注目した実学者たちが、「庶孼」、すなわち、士大夫家に生まれた庶子の身分であったことに注目し、朝鮮社会の身分制度における「庶孼」の位置づけについて実証的な分析を行う。この点について考察した日本における先行研究は、ほとんど見当たらないのが現状である。[10]一方で、十七世紀以後、文才を持った「庶孼」が朝鮮通信使の製述官や書記として派遣されるようになったことに焦点を当て、朝鮮通信使と身分について考える。最後に、一七六四年に製述官や書記として派遣された「庶孼」が、その文才を活かし多様な人物と詩社や集いを通して交遊していたことか

ら、本稿では、一七六四年の製述官や書記を「庶擘文人」と称することにする。「庶擘」という身分から彼らの「文人」志向まで横断的な考察を加え、一七六四年の交遊の当事者の面々を明らかにすると同時に、蘭葭堂会を評価した朝鮮の実学者との横のつながりを浮き彫りにしたい。

第二章では、第一章での考察を踏まえ、一七六四年の大坂で行われた交遊を含め、製述官や書記と日本人との唱和の道筋をより鮮明に検証する。分析方法としては、製述官や書記による使行録の記録に、蘭葭堂会の一員で僧侶の大典が記した筆談集『萍遇録』[11]を分析材料として取り入れ、記録を比較分析する。

先行研究では、製述官や書記の使行録ではなく、使行団のトップに値する正使・趙曮（ジョオム）の使行録『海槎日記』などが主に取り扱われている。[12] しかし、趙曮の『海槎日記』と、製述官や書記の使行録とではその内容を異にしている。端的にいえば、具体的な唱和ぶりはもちろん、蘭葭堂会との交遊を明らかにする有効な資料とは言いがたい。そこで、本稿では、日本ではほとんど注目されてこなかった一七六四年の製述官・南玉（ナンオク）の『日観記』を軸に据え、書記の成大中（ソンデジュン）の『日本録』、元重挙（ウォンジュンゴ）の『乗槎録』、金仁謙（キムインキョム）の『日東壮遊歌』などを主な資料として取り上げる。とりわけ、江戸に向かう前と帰路の大坂を中心に記録を時系列で追う。厳密にいえば、同じ大坂での記録とはいえ、江戸に向かう前と帰路とでは、その内容の性格が異なっている。江戸に向かう前の大坂での記録からは、おびただしい筆談唱和の雰囲気が窺え、通信使の役割に即した記録が多く見られる。一方、帰路での記録は、通信使の一員・崔天宗が対馬の鈴木伝蔵により殺害される事件が発生したことから、その内容が一変し、事件の収拾過程を中心に記録している。だが、ここに『萍遇録』の記録を加えることで、「蘭葭雅集図」の制作過程や交遊ぶりが読み取れるようになる。このように、その性格を異にしている様々な記録を同時に取り上げることによって、通信使の側面と「庶擘文人」としての側面、両方を検討することができ、さらには、交遊の具体相や「蘭葭雅集図」の制作過程がより鮮明になる。

以上のように、庶擘・文人・通信使といった三つのキーワードを中心とする多角的な考察を通して、まだ明らかにされていない一七六四年の大坂で行われた両国文人による交遊の有様やそれを可能にした背景や意義を明らかにすることが本稿の目的である。

第一章　「庶擘」を読み解く

ここでは、身分という社会的位置づけからアプローチする。まず、朝鮮社会における庶擘（ソオル：庶子）の位置づけについて、朝鮮王朝実録の記録を中心に検証したい。その上で、庶擘の置か

れた社会的事情や彼らの文才が、朝鮮通信使として派遣される上で大きなきっかけとなったことに注目する。さらには、「庶擘」が、詩社を結成する、あるいは、文才を持った文人同士の集いに加わることで培った文人志向について考える。本稿では、このような「文人」志向を好んだと考えられる一七六四年の製述官・南玉や三書記の成大中、元重擧、金仁謙を総じて「庶擘文人」と名付け、考察を進めたい。その上で、一七六四年の「庶擘文人」の面々やその交遊関係を分析し、文化交流の担い手であった庶擘文人の一側面を明らかにする。

（一）庶擘、世襲された差別

三宅英利は、『近世の日本と朝鮮』の中で、「朝鮮官民の日本観」を探るため、その対象を階級・立場・学問の三つのグループに分類した。その理由として、日本観の本質を探るためには主張者の社会的な性格を捉えることが重要であるため、と述べている。その一部を引用したい。

> 第一グループは、廟堂にあたる上級官僚群である。彼らの多くは日本人に接する機会がなく、日本に関する多くの典籍・史書を読み、交渉資料を見たり、帰国した通信使より聞き取ったりしていた。第二グループは、直接に日本に使行した通信使の一行である。彼らは日本人に接しての単なる印象、感情から、莫大な量に達する日本の情報、それも政治、経済、軍事、法制、社会、文化、習俗にいたるまでを集めた。その記録のなかには観察のみのものもあれば、鋭い判断もあるが、それらはすべて日本観としてまとめられ、もっとも豊富で鮮烈なものであった。第三グループは、民間の学者たちである。とりわけ、実学者と称される人たちは、朝鮮の現状を批判し、実利更生を考えただけに、外交にも新しい見識をもっており、日本に対しても冷静で客観的な認識の必要を唱えた。[13]

本稿で主に取り上げるのは、三宅による分類の第二グループと第三グループに属する、通信使と実学者である。ここで想起すべきは、通信使や実学者とは、彼らの身分でもなければ、彼らの生業でもないという点である。たとえば、製述官の南玉は、派遣されるまで官職についていなかった。書記の成大中や元重擧、金仁謙や北学派の一員で、後に「兼葭雅集図」について評価したとされる実学者・李徳懋も、いわゆる、文官ではなく、生涯「貧しさ」に苦しんだ。彼らに共通する点は、「庶擘」の身分であったということである。そこで、「庶擘」とは何か、「庶擘」と本稿で考察する通信使とは、どのような関わりを持っているのか、という点を述べたい。

まず、「庶孼」を考える上で、朝鮮社会における「庶孼」の特異性を理解するため、朝鮮社会の身分制度を確認する必要がある。一三九二年から一九一〇年までの五一八年間続いた朝鮮王朝時代は、江戸時代と同様に封建社会の中、厳格な身分制度が設けられていた。朝鮮社会の身分制度の根幹をなしたのは、「良賤」、すなわち、文武両班もしくは士大夫に値する両班と賤民の区分である。時代が下っていくにつれ身分の分化が見られたとするが、十六世紀以後には、両班と中人・商民・賤民の区別がなされていた。[14]

では、「庶孼」とは朝鮮社会の身分制度の中で、どのような位置づけを有していたのだろうか。簡単にいえば、「庶孼」は両班の父親と賤民の妾の間で生まれた子孫のことを指す。その場合、母親ではなく父親に従って、庶孼の身分は両班に属するものの、嫡子と厳格に区別される「制度的差別」を強いられていた。「制度的差別」とは、朝鮮の国法『経国大典』の成立当時から庶孼への差別が明文化され、それが朝鮮時代の末期まで続いたことをいう。その主な内容は、「庶孼禁錮」と称されるもので、科挙と呼ばれる官職につくための試験を受ける機会の剥奪や、清要職への任命禁止などが含まれている。「庶孼禁錮」は、朝鮮の三代国王太宗の時代である一四一五年から議論され、間もなく導入されたという。その内容を記録から確認したい。

各品庶孼子孫、不任顯官職事、以別嫡妾之分。
（各品の庶孼子孫は顕官〔地位の高い官職〕や職事に任命しないことによって、嫡妻と妾を区分する。）

（『朝鮮王朝実録』太宗十四年（一四一五）六月二十五日）

庶孼子孫、勿許赴文科生員進士試。
（庶孼の子孫には、文科〔文官登用のための試験〕や生員・進士試〔成均館入学の資格が与えられる試験〕に赴くことを許してはいけない。）

（『経国大典』禮典、諸科条）

さらに、一五五四年の『経国大典註解』の中で、庶孼子孫の解釈が「子子孫孫」とされたことによって、庶孼の射程は、両班の父親と良民か賤民の母親（妾）の間で生まれた一個人にとどまらず、その子孫の代々までに及ぶようになった。科挙は、身分と関係なく能力が重視されるべきであろう。にもかかわらず、科挙におけるこのような差別はなぜ存在したか。김경용（キムキョンヨン）は、科挙を通して検証されるべき能力の根源が「徳」にあることや、「徳」が適用される人間関係の土台が、夫婦倫理に基づいているという認識がその背景にあったと指摘している。[15]

当然のことながら、このような庶孼身分の世襲化が進むにつれ

様々な問題が起こった。深刻なのは、庶孼の数が増加していったという点である。김경숙（キムキョンスク）は、限られた官職の数をめぐり、その既得権を握っている士大夫が、新興士大夫の増加を抑えようとしたためであるとその理由を分析している。[16] しかし、庶孼の増加は、結果的に差別撤廃を求める人の増加につながり、時代が下っていくにつれ、「庶孼禁錮」の撤廃を求める動きも拡大した。「庶孼禁錮」が導入され百年以上が経った明宗十年（一五五五）頃、「庶孼禁錮」を緩和し、ようやく庶孼に科挙の機会を与えることを認める、すなわち、「庶孼許通」に関する議論がはじまる。ただし、その内容を見てみると、「母と祖母の代に身分の問題がない場合に限って」と制限が置かれ、実質的「庶孼許通」には至らなかった。翌年の一五五六年の記録からも、その内容を確認することができる。

庶孼許通事目內、良妾子至孫許通應赴試者、其母及其祖母邊良籍幷考覈、〔中略〕若幷考祖母所出之地、皆無痕咎然後許赴、則應赴者十無一人、似非許通庶孼本意。

（庶孼許通事目の内容に、良妾の子は孫代に至り、赴試に応じることを許通する場合は、その母及び祖母辺の良籍〔良民の戸籍〕を並びに考覈〔考え調べて明らかにすること〕する。〔中略〕並びに祖母の出生まで考慮し、すべてに痕咎がないとわかった後に赴試を許すならば、赴試に応じる人は十人に一人もいないため、これは庶孼を許通する本意ではない。）

（『朝鮮王朝実録』明宗十一年（一五五六）二月四日）

そこからさらに約百年が経過し、「庶孼許通」が改めて発令されるようになった。

申明庶孼許通後赴科之法。

（庶孼を許通した後に、科挙に赴くようにするという法をはっきり表明する。）

（『顯宗改修実録』顯宗一年（一六六〇）一月十一日）

「庶孼許通」を求める訴えは、二十一代王・英祖や二十二代王・正祖の時代に入ってから最も激しくなったとされる。[17] そのやり方としては、主に、国王に庶孼差別への不当を訴える上疏を呈する形で行われた。『朝鮮王朝実録』によると、例えば、英祖即位年（一七二四）十二月十七日には「窮人抱冤〔貧民が怨恨を抱く〕」という四文字の紙を抱えた二六〇人が上疏を呈したという。だが、依然として、庶孼許通は実現されず、二十四代王・憲宗十四年（一八四八）十一月八日の記録によると、京外儒生李鎭宅等八千人、上疏請庶流疏通（京外の儒生、李鎭宅などの八千人が上疏し、庶流の

疏通を請う。）など、十九世紀半ばまで庶流の疏通を求める動きは絶えなかったことが窺える。ここで英祖八年（一七三二）に文臣、趙鎮世（ソジンセ）が上疏した内容を見てみる。

官人而不問能否、惟視門閥、實我國之痼弊。士夫不必皆賢、庶孼不必皆不肖、部官亦靳與、則爲庶孼者、寧不窮且隘乎、請隨才收録、俾無向隅之歎。

（人に官を授けるのにその能力の有無にかかわらず、ただ門閥だけを重視するのは、実に我が国の弊害である。士大夫でも必ずしも皆が賢いわけではなく、庶孼が必ずしも皆劣るわけではないのに、部官の職を与えるのを恨むのであれば、庶孼になった者は、どうして行き詰まらないでいられよう。才に従って収録し、〔彼らを〕隅で嘆かせないことを請う。）

（『朝鮮王朝実録』英祖八年（一七三二）二月十二日）

その後、英祖二十三年（一七四七）になってようやく、中人と庶孼は生員と進士に登用されることになった。正祖即位年（一七七六）に、王室の図書館兼研究機関である奎章閣（ギュジャンガク）が設置されると、正祖三年（一七七九）に初めて、李徳懋、朴齊家、柳得恭（ユヅコン）（一七四八～一八〇七）、徐理修（ソイス）（一七四九～一八〇二）など、文才のある庶孼が検書官と呼ばれる、書籍の校正及び書寫をする職に登用されるようになった[18]。だが、検書官は従七品[19]の下級雑職に当たる。このことは、十八世紀後半になっても庶孼に対する差別が続いていたことを物語っている。『朝鮮王朝実録』以外からも、庶孼を取り巻く制度的差別について論じた記録を確認できる。本稿で取り扱う一七六四年の通信使書記の成大中は『青城雑記』で

英廟壬辰、始通清職、然朝議不樂也、行之五年而復閟

（英祖、壬辰年〔一七七二〕に〔庶孼を〕清職に登用する道が開かれたが、朝廷の議論が好まず、五年行われた後にまたその道は閉ざされた）

（成大中『青城雑記』巻四、「醒言」）

と記録した。成大中が述べているように、国王が庶孼許通を決めても、朝廷の議論、すなわち、士大夫によって阻まれてしまうような状態が続いたといえるのだろう。

さらに、庶孼の差別には、科挙や任職の問題以外にも、相続や家を継ぐことの困難さや自分の親を父母と呼ぶことのできないといった問題などがあった。前者の問題については、正祖二年（一七七八）に全国の庶孼儒生三二七二人が上疏をし（『朝鮮王朝実録』正祖二年（一七七八）八月一日）、後者の問題については、朝鮮後期を代表する実学者、丁若鏞（ジョンヤクヨン）（一七六二～一八三六）と朴趾源（パクジウォン）

（一七三七～一八〇五）が著書の中で論じている。[20]

朝鮮社会における庶孼の位置づけにおいて明らかであるのは、三百年以上もの長い間、庶孼は代々に世襲された制度的差別を強いられていたことである。たとえ科挙に合格できるほどの優れた文才を有していたとしても、庶孼は朝鮮社会の身分秩序からはみ出した特殊な階層であった。「庶孼禁錮」の保持は、国王や国法によるものというより、既得権を持った士大夫によるものであったことが考えられる。血縁に頼らない傾向のある日本近世の社会とは異なり、朝鮮社会における庶孼は、嫡子という正統性を重んじる社会背景と、限られた官職を取り巻く両班「家（가・ガ）」の「生計」問題が相まって生み出されたものであった。以上のように、朝鮮社会における「庶孼」身分を取り巻く社会的情勢やその特殊性について検討した。これまで日本でほとんど注目されてこなかった朝鮮の「庶孼」身分について検討することは、後述する「庶孼」と朝鮮通信使との関係および、一七六四年の両国文人による交遊を考える上で重要な手がかりとなる。

（二）朝鮮通信使における庶孼の位置づけ

庶孼の社会的位置づけは、朝鮮通信使として「文才」を発揮することと、どのような関わりを持っていたのだろうか。一七六四年の通信使から見ると、「名門」庶孼一家として、その文才で知られる、書記・成大中の家のように、代々通信使として派遣される一族も存在した。[21]一方で、南玉、元重擧、金仁謙は、文才によって通信使に選ばれ、帰国後は郡守や県監など下級ではあれ、一定の管理職につくことができた。

まず、朝鮮通信使全般において庶孼の果たした役割について考えてみたい。通信使の中で「文才」を持った庶孼に求められた役割は、製述官と書記であった。仕事の内容としては、為政者集団や学者など日本の随所で出会う人々と漢文を用いてコミュニケーションを図ることであった。李元植が指摘するように、とりわけ、十七世紀以降、通信使の役割が政治的・外交的なものから次第に、文化交流へとその重点が移っていったという外部的要因も働いたため、製述官・書記の役割は、十七世紀以後、重要性を増していった、と考えられる。[22]

製述官とは、第七回の一六八二年の使行から正式に使われた名称で、それまでは、学官や吏文学官、読祝官などと呼ばれていた。書記の場合は、第六回目の一六五五年から本格的に派遣され、一七一一年の使行からは、三人へと増員されるようになった。ここで注目すべきは、製述官と三書記のほとんどが、庶孼の身分であったことである。[23]言うまでもなく、それを可能にしたのは、先述の通り、庶孼の「文才」であり、製述官や書記は、両国の文化交流を担う存在であったと考えられる。庶孼の使行参加について、

김경숙（キムキョンスク）は、庶擘は商業や農業につくこともできず、「文」が唯一力を発揮できる世界であったと分析した上で、士大夫が製述官や書記職を忌避する傾向にあったことも一つの背景として作用したと述べている。[24] このように、英祖時代（一七二四～一七七六）から人材登用にあたって、能力のある庶擘にも官職につく機会が以前より多く与えられるようになったとはいえ、科挙に合格しても顕官につくことのできなかった庶擘文人にとって、朝鮮通信使の製述官や書記という役割は、数少ない選択肢の一つであったのではないかと考えられる。だが、いずれにしても、製述官や書記として日本に赴いた当時の庶擘の認識については、より詳細な検証が必要であろう。

（三）一七六四年の庶擘文人と交友関係

ここからは、実際に一七六四年の通信使として派遣された製述官・南玉と三書記・成大中、元重擧、金仁謙に光を当て、「庶擘」としての彼らの生き方や、「庶擘文人」の一面に注目しながら、彼らの交友関係と共通点を探る。

製述官・南玉（一七二二～一七七〇）

字は時韞、号は秋月。祖父の南晳（ナンソク）と父の南道赫（ナンドヒョク）ともに進士を務めた。相曾の代から庶擘の系統となったという。文才に長けたものの非常に貧しかったとされ、三十二歳の一七四六年には、科挙を受ける士大夫の子孫を相手に売文をしたことを理由に流刑され、その翌年、赦免された。[25]『朝鮮王朝実録』には南玉の売文に関する記録が残されている。

> 國家得人之道專在科擧。而近來士子不讀書而事僥倖故、一種賣文之徒誤人甚多。〔中略〕如南玉、朴師灝、申嶷之類皆以賣文得名、此輩宜遠地定配也。
>
> （国家が人材を得る道とは、もっぱら科挙にある。しかし、近頃、士の子孫が読書をせず、僥倖なことに専念するため、一種の文を売る徒が人を過つことが非常に多い。〔中略〕南玉、朴師灝（パクサホ）、申嶷（シンウィ）のような者はみな、文を売ることによって名を得た。この輩は遠くに定配〔流刑〕させたほうがよい。）
>
> （『朝鮮王朝実録』英祖二十二年（一七四六）三月二十七日）

この記録からは、十八世紀半ばの朝鮮社会で科挙が本来の趣旨を失いつつあることもわかる。ここに名が挙げられている朴師灝、申嶷については、すでに取り上げた、英祖即位年（一七二四）十二月十七日の『朝鮮王朝実録』から見た庶擘二六〇人の上疏に参加していた庶擘であった。それは、王命の出納を司掌した機関、承政院で作成された毎日の記録である『承政院日記』の同日の記録

からも確認できる。ところで、南玉は、科挙に応じる士大夫の子弟に文を売ったことで流刑にされた。ここで、もう一人、すでに取り上げた李徳懋の記録にも触れておきたい。李徳懋は、『古芸堂筆記』の中で自らを補破詩匠（破れた詩章を直す者）と名乗っていた[26]。同時代を生きた庶孼文人の代表格である二人の記録から、売文は、漢陽（今のソウル）という都市に生き、商業や農業に従事することもできなかった庶孼にとって、生計の手段であったことがわかる。

次に、南玉の交友関係を把握したい。使行の翌年である一七六五年六月十八日の『朝鮮王朝実録』は、次のように記録している。

鳳漢又薦李鳳煥、南玉、成大中爲庶流中人才、請次第調用。
（鳳漢〔洪鳳漢〕がまた、李鳳煥、南玉、成大中は庶流〔庶孼〕の中の人材であると薦めている。順に登用するよう請う。）
（『朝鮮王朝実録』英祖四十一年（一七六五）六月十八日）

ここで注目すべき二人の人物が李鳳煥（イボンファン）と洪鳳漢（ホンボンハン）である。まず、李鳳煥（?～一七七〇）は、庶孼身分で、南玉が参加した使行の前回に当たる一七四八年の使行に書記として参加した。とりわけ、南玉とは親交が深かったといわれる[27]。「鳳煥体」と呼ばれる詩文体の先駆者でもあった李鳳煥については、同時代の学者である李奎象（イギュサン）（一七二七～一七九九）が執筆した人物誌『幷世才彦録』の「文苑録」の中に記録がある。

李鳳煥
所謂椒林一隊、莫不景従於鳳煥體。
（いわゆる、椒林〔庶孼を卑俗に呼ぶ言〕の人々の中で、鳳煥体を慕わないもの、従わないものはいなかった。）

この二人の文才を評価し、英祖に「庶流の文才」の登用を提言した人物が、正一品の最高職の右議政・洪鳳漢（一七一三～一七七八）である。南玉が洪鳳漢家の塾師として務めていたことを機に、李鳳煥を紹介し、洪鳳漢家の人々とも詩社を結成し交遊し、後には洪鳳漢の息子たちとも樊川（ポンチョン）詩社を結成する[28]。その詩社の一員であった洪稷榮（ホンジクヨン）が残した詩文集『小洲集』によると、洪稷榮は、樊川に屏居しながら三十年も文人による私会・文苑を行っていたという[29]。なお、南玉、李鳳煥は、それ以前にも文臣の趙載浩（ジョジェホ）（一七〇二～一七六二）と「梅社」という詩社を結成し交遊していた。とりわけ、「梅社」には、李鳳煥と同じく一七四八年の使行に書記として参加した李命啓（イミョンゲ）（一七一六～?）も加わったとされ、身分を超えた文人の交遊を行った。「梅社」は一七三八年に本格的

にはじまったとされるが、趙載浩はこの詩社で次韻した二百余りの詩を『梅社五詠』と題した[30]。このように、「庶擘文人」として文才が認められていた南玉だが、その後の英祖二十九年（一七五三）には、文科の科挙に合格し、四十三歳の一七六三年に、製述官として第十一回目の日本使行に派遣された。使行から復命した翌年の一七六五年には、従六品の遂安郡守に任命された。

書記・成大中（一七三二～一八〇九）

字は士執、号は青城。成大中は、昌寧（チャンニョン）成氏桑谷公派の十九代孫であり、十五代孫・成後龍（ソンフリョン）の代から庶擘になったとされる[31]。成大中家は先述のように、「名門」庶擘家ともいえるが、とりわけ、朝鮮通信使と深く関わりを持っていたことは注目すべきであろう。その歴史は概観すると、一六八二年の製述官・成琬（ソンワン）や一七一九年の書記・成夢良（ソンムリョン）、一七六四年の書記・成大中と続くが、この昌寧成氏桑谷公派の場合、十六代孫から二十二代孫にまたがって、科挙の合格者を十五人も輩出している。その理由として、손혜리（ソンヘリ）は、七十六年の間、四回も詩社を結成していたことが、多数の科挙合格者を輩出した「名門庶擘家」の下支えになったと分析した[32]。だが、彼らの大半は、下級官職の従六品の県監や察訪にとどまった。前述のように、英祖の代に強まった庶擘に対する差別撤廃を求める動きにより科挙への機会は得たものの、依然として活躍する場は狭きものであったと思われる。同じく『幷世才彦録』の「文苑録」には成大中について次のようにある。

爲人樂易、善談論、談鋒多崢嶸、篤於故友。
（心楽しく安らかな人柄で談論が巧みであり、言論の勢いがきわめてするどいが、友人には誠実である。）

この記載には、成大中の性格が表れている、といえよう。成大中はもう一人の書記・元重擧とともに、先述した北学派の実学者と交遊があった[33]。なかでも、李徳懋との交遊が深く、成大中の著書『青城雑記』や李徳懋の『青荘館全書』からは交遊の有様を見ることができる。李徳懋は、成大中が蒹葭堂側に制作を依頼したとされる「蒹葭雅集図」と、蒹葭堂会についても大いに評価しており、注目に値する。具体的に見れば、『耳目口心書』五巻の中では、大典の「蒹葭雅集図」序文や七人の詩文をそのまま引用し、『青荘館全書』巻六十三の「天涯知己書」の中では、蔵書家としての木村蒹葭堂を評価している。さらに、『清脾録』巻一では「蒹葭堂」という頁目を設け、蒹葭堂会について詳細に記している。中国に向かう燕行使に選抜され清を訪れたことのある李徳懋は日本にも興味を持ち、成大中や元重擧を通して入手した日本に関する情報を著書『青荘館全書』の中で記している[34]。成大中は一七六四

年の使行に書記として参加し、復命後は、興海（現在の浦頂（ポハン）市）郡守に任命された。その後、先述のように庶孼許通に力を入れた正祖に認められ、一七九二年、従三品の地方の長官職である府使に抜擢された。これは、庶孼としては異例の出世であった。

書記・元重擧（一七一九～一七九〇）

字は子才、号は玄川、遜菴、勿川など。一七五〇年に生員や進士を選抜する司馬試の科挙に次席で合格したが、十年間も職を与えてもらえず、四十歳になって奉事という従八品の下級職についた。元重擧は一七六四年の使行に書記として参加し、復命後の一七七〇年に各道の交通や通信機関を管理する従六品の職・松羅道察訪に任命されたが、六十日で職を離れざるを得ない状況となり、隠居したという。その後、一七七六年、宮殿の花や果樹などを管理する官庁・掌苑署で文書と符籍を管理する従六品の主簿に任命されたことを機に、燕巖グループの李徳懋、朴齊家（パクジェガ）（一七五〇～一八〇五）などとともに、地理書『海東邑誌』の編纂作業に加わった[35]。なかでも、李徳懋と元重擧は親戚の間柄で、李徳懋の記録から見ると、庶孼の年長者として生きてきた元重擧に対して尊敬の念を抱いていたことがわかる。成大中とも交友があり、成大中の『青城雑記』や李徳懋の『青荘館全書』などに、次韻した詩や書簡などの記録が見られる。その中から、李徳懋が元重擧に送った詩と、記録を紹介したい。

文章能驅人　文章は人を追い立てて
催登萬里船　万里に向かう船に乗ることを促す
長風拂青衫　遠くから吹く風が青衫〔国の祭祀に着た藍色の上衣〕を払い
一笑澹無牽　軽い笑いは淡々と平然としている
世人皆榮之　世間の人は皆これを誉れとし
書記看如仙　書記を神仙のように見るが
書記那可好　書記は決してこれを好むことはない
吾意悽獨憐　私ひとりが憐れみいたましく思う

（李徳懋『嬰處詩稿』巻二、「奉贈書記遜菴元丈重擧隨副使之日本」）

玄川元丈、暮年薄宦、久而不調、買山之錢、去益難辦。吾輩之窮、胡至於斯、大抵此丈、溫厚清直、堪爲後生標準、但惜其知者甚鮮、而鬢鬚純白、衰象日著也。

（玄川元丈〔元重擧〕は、長い間登用されなかったので、晩年になって薄宦〔薄給の使官〕についた。買山錢〔引退後のための山を買うお金〕の用意が益々難しくなった。なぜ、我らはこのような状況になってしまったのか。およそこの人は温厚で清直で、子孫の模範になる人である。しかし、それを知る人は非常に少なく、髪

やひげが真っ白で、としよる姿は日々著しい。残念なことだ。）

（李徳懋『雅亭遺稿』巻八、「尹曾若」）

これら二つの記録から、庶擘には文才があったものの、生涯「貧しさ」から解放されることはなかったことがわかる。また、興味深いことに、李徳懋の詩からは、書記になること自体が庶擘にとって必ずしも歓迎されたのではなく、先述のように、その苦労を知りながらも参加せざるを得ない、数少ない選択肢であったことが見て取れる。

書記・金仁謙（一七〇七～一七七二）

字は士安、号は退石。曾祖の金壽能（キム・スヌン）の代から庶擘となり、金壽能も科挙に及第したにもかかわらず、県監にとどまった。父と十四歳で死別した金仁謙は、貧しい生活のため、学問に専念することもできず、四十七歳となる一七五三年になって科挙に合格した[36]。『幷世才彦録』「文苑録」を見てみると、次のようにある。

處地庶擘、而持身恭處心高。故人莫敢侮。聰明一過目終身不忘。平居、不讀書不吟詩、而吟詩輒圓熟、寔天才。

（庶擘の身分であったが、恭しく身を持し、存心が高い。そのため、人々が侮ることはなかった。聡明で一度目を通したものは一生忘れなかった。普段は読書をせず、詩を吟じないが、詩を吟ずるともっぱら円熟していた。まことに天才である。）

金仁謙は、五十七歳で一七六四年の使行に書記として参加し、復命後は、やはり下級官職の砥平県監に任命された。

以上、一七六四年の使行に参加した人物に焦点を当て、庶擘と朝鮮通信使の製述官や書記との関係性について概観した。ここで明らかになるのは、庶擘文人が文才によって科挙に合格したにもかかわらず、顕官に任命されることは難しく、貧しさにさらされていた、ということである。さらに、使行からの復命後は下級職ではあれども、共通して郡守や県監職に任命されていた。つまり庶擘にとって、製述官や書記になることは、その後の役職への保証でもあった、ということがいえるだろう。だが、同時にそこから窺えるのは、幅広い交遊を持つ「庶擘文人」の一面であった。言い換えれば、彼らが通信使として日本の随所で多くの人々と「文」をもって接した際に、製述官や書記の役割のみならず、文人としての姿勢もあったと考えられる。このような姿勢は、第二章で、検討するように、最も筆談唱和に追われていた大坂で、木村蒹葭堂をはじめ蒹葭堂会の人々に出会い、交遊する理由を考察する上でも、重要な手がかりとなる。안대회（アンデフェ）が指摘するように、十八世紀朝鮮の漢詩史において庶擘は、士大夫と技術

職中人身分の文人の「中間者」的存在であり、斬新な詩風を持った。[37] 中国と同様、朝鮮の文人文化を牽引したのは、士大夫の文化であった。だが、十八世紀、漢陽という都市を生きた士大夫ではない身分による新たな文人の有様は、大坂に生きた多様な層の文人の集いである蘭葭堂会の人々と相通じるものがある、と考えられるのではないだろうか。

第二章　記録から見る一七六四年の交遊

ここからは、一七六四年の使行に参加した南玉らが使行途中の大坂で蘭葭堂会の人々と交遊し、「蘭葭雅集図」が制作されるまでの道のりを当時の記録から時間順に追ってみることにする。本章では、まず、製述官や書記が日本の民衆と交わした筆談の規模や唱和の雰囲気を探ることから考察をはじめる。先述のように、本稿の立場は、南玉らが通信使の役割と同時に、「庶擘文人」の姿勢を持っていたことが大坂での交遊を可能にした一因となったというものである。それをより明確にするためには、交遊そのものに注目するのも重要だが、その前後の過程にも光を当てる必要がある。

その両方を考察する上で、主な材料となるのが日記形式の使行録である。一七六四年の使行の場合、製述官をはじめ、三書記がいずれも使行録を記しており、これは、十二回にわたる使行の中でも他に例を見ないことであった。[38] 本章では、日本ではほとんど注目されてこなかった製述官・南玉の使行録『日観記』を中心に、必要に応じて三書記の使行録の記録との比較を試みる。『日観記』は大きく、春・夏・秋・冬に分かれた十巻構成で、「春」には凡例が、「夏」「秋」「冬」の前半までは日記が、「冬」の後半には総記が設けられている。また、『日観記』に加え、帰路の大坂については蘭葭堂会の一人・大典が記した筆談集、『萍遇録』の記録との比較も行いながら「蘭葭雅集図」の制作の過程についても考察したい。

（一）一七六四年使行における唱和の規模

まず、一七六四年の詩文・筆談の唱和規模について触れておきたい。唱和の規模を推測する上で、目を引くのが『日観記』の巻「春」の凡例にある「唱酬諸人」の頁目である。南玉は「唱酬諸人」に使行期間中出会った約五百人の日本人の名前と号、字、職業、以前の通信使一行との唱酬の可否などを詳細にまとめて記した。「唱酬諸人」は、滞在した地域順に名簿形式で書かれているが、それをもとに、地域別の人数を表でまとめてみると次の通りである（表1）。

ここで注目すべきは、大坂で交流した人数である。南玉らが大坂に逗留し、詩文唱和や筆談を行ったのは、一七六四年一月

表１　南玉の『日観記』の「唱酬諸人」における詩文唱和・筆談人数の記録

地域	對馬州	肥前州	筑前州	長門州	周防州	豊後州	備前州	播摩州	攝津州	山城州
					上関	韜浦	牛窓	室津	大坂城	西京
人数	14	4	9	8	4	1	5	9	137	45
地域	近江州	美濃州	尾長州	三河州	遠江州	駿河州	伊豆州	相模州	武蔵州	合計
	彦根	今須・大垣							江戸	
人数	17	39	51	7	14	14	7	4	112	501

二十二日から二十五日までの三日間と、一七六四年四月四日から六日までの帰路の三日間で、計六日間だけである。にもかかわらず、かなり多くの人々が大坂で唱和を求めてきたことが見て取れる。この数の人々が、複数回訪れた可能性を考えると、かなりの人々から詩文や筆談が求められていた、ということが明らかになる。さらに、復命後の記録からも、唱和の規模がわかる。

上曰、南玉得名云矣、何者多作乎。對曰、四人所作之數略同矣。上曰、南玉作幾篇乎、玉對曰、作千餘首矣〔中略〕上曰、成大中何如、對曰、非常矣。元重擧、金仁謙亦作千餘首矣。

（王が言った。南玉は名を得たと聞いたが、誰が多く詩作をしたのか。私が言った。四人の詩作の数はほぼ同じでした。王が言った。南玉は何篇を作ったのか。南玉が言った。千首あまりを作りました。〔中略〕王が言った。成大中はどうであったのか。私が言った。優れたものでした。元重擧や金仁謙もまた、千首あまりの詩を作りました。）

（趙曮『海槎日記』一七六四年七月八日）

四人とも千首余りの詩作をするほど、活発な唱和が行われていたようである。なぜ、日本の人々がこのように多くの詩文や筆談を求めたのか、その理由について仲尾宏は、都市の町人や豊かな農民たちも漢字を含んだ文学を学ぶことで、儒学的教養の必要性を感じ、漢字文化への参加意欲が相まって、先進国の知識人である朝鮮通信使との接触を望むようになったと指摘した[39]。興味深いことに、南玉の使行録『日観記』の中の「総記」[40]によれば、なかには、仲尾のいう「漢字文化への参加意欲」とは無関係な理由で詩文や筆談を求めてくる人々もいたという。「総記」の「書画」という項目には、次のような記述がある。

其俗必求我人之手、或以爲男女婚嫁之資、或以爲己疾順脫之

方便。

（〔倭人は〕その風習として、必ず朝鮮の人が手掛けたものを求めてくる。男女が結婚をする際の資金にするためか、自分の病気を治す手段とするためだという。）

当時の日本の人々にとって、海を渡ってやってきた朝鮮の人々が手掛けたものを入集するのは、一種の「縁起物」を手に入れることとして認識されていたのだろう。無論、このような例がすべてを物語るわけではなく、一断面に過ぎないかもしれない。だが、十八世紀半ばの日本では漢詩や漢文が広い層にまで広まっていたと考えられる。有坂道子が指摘するように、このような現象は、すすんで多芸を楽しむ人々が増え、様々な身分や職業の人に文事が受け入れられるようになったからであろう[41]。大坂の場合であれば、木村蒹葭堂などの町人文人と位置づけるべき人々が、このような現象を牽引していたことは否定できない。いずれにしても、一七六四年の使行では、幅広い層の人々が様々な目的で朝鮮の製述官や書記から詩文や筆談などを手に入れようとしていた。

（二）江戸に向かう前の大坂

ところで、南玉らの庶孽文人はいつ、どのようにして、木村蒹葭堂の名を知るようになったのだろうか。まず、その経緯を探りたい。手がかりとなるのは、南玉らが対馬の次に逗留した藍島で、儒者で医者の亀井南冥（一七四三～一八一四・名は魯、字は道載、通称は主水）と出会ったことである。朝鮮通信使は一七六三年十二月三日藍島に到着し、二十三日間滞在した。十二月八日、初めて亀井南冥と唱和をした南玉は、彼の詩文について高く評価し、次のように記している。

龜井魯年甫廿一、詩筆翩々才氣甚鋭。
（亀井魯〔南冥〕は二十一歳にもかかわらず、その詩筆は軽快で、才気は非常に鋭い。）

（南玉『日観記』一七六三年十二月八日）

龜井魯致書、來欲見多阻、之語並致所著東遊詩文、乞題評。其所從遊者、所謂獨嘯菴永富鳳、魯以為海東一人僧大潮、木弘恭。皆在大坂。
（亀井魯〔南冥〕から書簡が送られてきた。我々に逢うため訪れたかったが阻まれたとのことである。また、自身の著書・東遊詩文を送り題評を求めてきた。亀井魯が従遊した者は、獨嘯菴永富鳳〔永富独嘯庵〕である。亀井魯〔南冥〕が海東の第一人者と思うのは、僧侶の大潮と木弘恭〔木村蒹葭堂〕である。いずれも大坂にいる。）

（南玉『日観記』一七六三年十二月九日）

亀井南冥は大坂に遊学した際に師事した医者・永富独嘯庵（一七三二～一七六六・名は鳳、字は朝陽、号は独嘯庵）だけでなく、僧侶・大潮元皓（一六七六～一七六八・肥前の人。名は元皓、字は月枝、号は大潮）や、木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二・名は孔恭、字は世粛、通称は坪井屋吉右衛門、別号に巽斎）とも交遊し、そのような自身の経験から南玉に、彼らを「海東の第一人者」と薦めた。『日観記』の藍島での記録を見ると、滞在期間中、南玉らがほぼ毎日、亀井南冥と詩文や筆談を交わしたことがわかる。さらに、十二月十七日には、亀井南冥が永富独嘯庵宛に書いた書簡を、南玉らが大坂にいる間に伝えてほしいという頼みごとをする。亀井南冥との交遊の詳細をここですべて扱うことはできないが、大坂から遥かに離れたところで行われたこの交遊についても注目を払わなければならない。

このように亀井南冥から木村蒹葭堂に関する情報を得た南玉らは、十二月二十六日に藍島を出航し、大坂へ向かった。大坂には一七六四年一月二十一日から五日間滞在し、一月二十六日にまた江戸へと出発した。注目すべきは、この時、実際に大坂で詩文の応酬が行われたのは、大坂に到着した後の三日間だけ、という点である。短い滞在期間中、通信使と接することを待ち望んでいた人々との唱和ぶりとは、どのようなものであったのだろうか。その雰囲気を窺わせる使行録の記録を確認したい。亀井南冥から蒹葭堂の名を耳にした南玉らは、一月二十二日、大坂で木村蒹葭堂と出会うことになる。

此城人士求詩者十百爲群、半在堂室、半在門屛、來必皆大坂之人、而四方之所都會、前者未和、後者復至、源文雨、南川維遷、奥田元繼、木弘恭、字世肅、號蒹葭堂、開堂於浪華之上、蓄中國奇書、歲買千餘種。日會四方詩酒之徒、以豪士名、卽龜井魯所稱也。

（この都市の人士、詩を求める者たちが十、あるいは百と群れをなした。その半分は居間に、残りの半分は門と屛のところにいた。ここに来た皆が大坂の人ではないのか。〔大坂は〕四方から人が集まる都会なのだ。先に来た者との唱和が終わっていないのに、その後ろにまた列ができた。源文虎〔丹羽嘯堂・儒者〕、南川維遷〔平井雅斎・書家〕、奥田元繼〔奥田尚斎・儒者〕、木弘恭、字は世肅、号は蒹葭堂とする。浪華に堂を開き、中国の奇書を集め毎年千以上を買い集めているという。日々四方から詩と酒を好む人々を呼び集めることによって、豪傑な文士として名が知られ、すなわち、亀井魯〔南冥〕がたたえた人物である。）

（南玉『日観記』一七六四年一月二十二日）

終日接客多筆談、其問目數十紙、盖八十餘人。〔中略〕木弘恭、

字世肅、既龜井魯所□蒹葭子者。

（一日中客と付き合い大量の筆談を行った。その問答の目録が紙数十枚分に至ったので、八十人余りの人が来たことであろう。〔中略〕木弘恭は字が世肅で、すでに亀井魯〔南冥〕が〔言っていた〕蒹葭子である。）

（元重擧『乘槎録』一七六四年一月二十二日）

大坂城

二十三日。食事の前から大勢の倭人が詰めかける。筆談は難渋し、和酬するのもうんざりする。病中で体もだるいが、国王より遣わされてきた意義は、この者たちを感服させ国王の栄光を知らしめるところにある。たとえ病が重くても書かぬわけにはいかぬ。〔中略〕大勢の者がいっぺんに出すので、積めばあごに届くほどになる。さらに応じてやれば次々と限りなく差し出してくる。〔中略〕我々に会いたい一心で二、三百里も離れた所から食料持参でここまで来て、五、六か月も待っていたとのこと。万が一書を書いてやらねば、その落胆はいかばかりであろう。勿論老少貴賤を問わず、誰にでも書き与えるのである。このため、我々の仕事は昼夜を問わず、休む暇とてない。南、成、元の三人の同僚も同様に苦労しているという。(42)

（金仁謙『日東壮遊歌』一七六四年一月二十三日）

留大坂城。覓詩人沓至此昨尤多、以室狭不能容。張墨塁、雑然進者、如蜂蟻之集、送投詩紙、如科場投巻之爲旁作。〔中略〕詩必求自書、又必求印章、酬詩之餘、一一繕寫、一一印章、尤致紛氄無暇〔中略〕唱酬又立鷄。

（大坂城にとどまった。詩を求める人の数が昨日より増えた。しかし、部屋が狭いため全員が入ることはできなかった。墨と紙をひらくと、目まぐるしく人々が絡みつき、まるで蜂やありの群れが寄ってくるようで、詩を書いた紙を投げ合う姿は、まるで科挙の試験場で試巻を投げるようであった〔中略〕〔倭人は〕詩は必ず自分で書くことを要求し、また、印を押すよう求めた。それで、詩の酬唱後にいちいちそれを書き写し、いちいち印を押すから余計忙しくなった。〔中略〕この日も唱酬が終わると鶏が鳴いた。）

（南玉『日観記』一七六四年一月二十三日）

使行録の一部ではあるが、このような南玉らの生々しい記録から大坂城での慌ただしい唱和の雰囲気が窺える。金仁謙の記録からもわかるように、通信使に接するため五、六カ月も待ち望んでいたなどは非常に興味深い事実であろう。ここで注目すべきは、このような状況の中、南玉らが木村蒹葭堂について亀井南冥が言っていた人物であると特記している点である。蒹葭堂についての前記の内容を見てみると、木村蒹葭堂の文人ぶりについて特記

していることがわかる。「庶擘文人」の見方からすれば、木村蒹葭堂は非常に興味深い人物であったのだろう。木村蒹葭堂らは、亀井南冥と同様、南玉一行が大坂を去るまで毎日のように大坂城を訪れ、唱和をしていたことが南玉、成大中、元重擧の記録からわかる。江戸に向かう前日の一月二十四日、南玉は以前、藍島で永富独嘯庵に伝えるよう頼まれていた亀井南冥の書簡を木村蒹葭堂に預けた。さらに、木村蒹葭堂と儒者・福原承明（一七三五～一七六八・名は尚脩、号は映山）が印章に長じていることを知り、作ってもらうよう頼んでいた[43]。

（三）帰路の大坂

ここからは、帰路の大坂での出来事に注目しながら、以前の大坂では南玉らと顔を合わせていない大典との交遊、さらには、「蒹葭雅集図」の制作経緯について考察を進める。周知のように、一七六四年の通信使における最大の困難は、通信使の一員・崔天宗（チェチョンジョン）が対馬の訳官・鈴木伝蔵によって殺害された事件であった[44]。本節では、殺人事件の発生後、一般の人との詩文唱和が途絶えた状況にもかかわらず、南玉らが大坂を去るまで、絶えることなく蒹葭堂会との交遊を続けたことに注目する。そのことから「蒹葭雅集図」制作のなりゆきも浮き彫りになると考えられるからである。ここで注目すべき人物が、蒹葭堂会の一人で僧侶の大典（一七一九～一八〇一・名は顕常、字は梅荘、号は大典）である。大典は四月五日から、通信使一行が大坂を去ることになった五月六日まで南玉らと筆談を行い、それをまとめ『萍遇録』とした。その記録からは、使行録からは見当たらない交遊の有様が詳細にわかる。そこで、ここからは使行録と『萍遇録』との内容の相違に注意を払いながら、逗留した大坂での交遊を明らかにしたい。

通信使一行が江戸を出発し、帰路の大坂についたのは、一七六四年四月四日のことである。本来、一行は大坂で三日間逗留し、四月七日には朝鮮に向かう予定であったが、先述のように、四月七日、通訳と事務を担当する中官である都訓導・崔天宗が日本人によって殺害される事件が発生した。この外交上最悪の事態を収拾するため通信使一行は、一カ月ほど大坂に残留することになる。事件後のなりゆきを概観すると、四月十四日に鈴木伝蔵が事件の犯人と特定され、四月十八日には逃走中の鈴木伝蔵が逮捕される。その後、五月二日に処刑されることで事件は一段落した。まず、事件当日の『日観記』の記録を見てみよう。

四月初七日、留大坂之第三日、遭都訓導崔天宗被刺殺死之變、留二十九日、〔中略〕一倭擣胸剚頸、驚起刀常在頸、自抜而逐之、倭走出門至厨間、踐厨宿格軍之足、格軍睡熟、雖驚而莫之省、天宗逐之及門、氣盡而止、天明天宗殞絶

（四月七日、大坂に滞留して三日目。都訓導の崔天宗が刺殺され、二十九日間大坂にとどまった。〔中略〕〔崔天宗が寝ていると〕、一人の倭人が胸のところを押し、首に刃物を刺した。〔崔天宗が〕仰天し起き上って、首に刺されている刃物を自ら抜き出し、その倭人の後を追った。逃げた倭人が走って門を出て厨房につき、そこで寝ていた〔朝鮮の〕格軍の足を踏んだが、格軍は熟睡しており、その状況に気付けなかった。倭人を追った崔天宗は門のところに至っては気を失い、足を止め、夜明けには息絶えた。）

（南玉『日観記』一七六四年四月七日）

当然のことに、この事件を機に詩文唱和は中止された。筆談は事件の真相を明らかにするためかろうじて継続したが、南玉、成大中、元重擧、金仁謙の使行録の内容も一変し、事件の収拾過程を中心に記されるようになった。このような内容の中で使行録に度々その名が挙がるのが、大典をはじめとする蒹葭堂会の人々である。それには、事件発生後、朝鮮文人の宿舎への出入りが僧侶や事件関連者のみに厳格に制限されたことから、僧侶の大典が比較的出入りしやすかったという理由も大きいが、彼が蒹葭堂会の一員であったことから、信頼も高かったと思われる。大典は一月の大坂での交遊には参加しておらず、四月五日になって初めて顔を合わせた。南玉らと大典との出会いはどのようなものであったか。

至夜分魯堂、仲達、周宏、導来話、竺常去時不見者、而非以名利持身者

（真夜中に魯堂〔那波魯堂〕、仲達〔富野義胤〕、周宏、周遵がやってきて話を交わした。竺常〔大典〕は以前、会ったことのない者だが、明利を狙って立ち回る者ではなかった。）

（南玉『日観記』一七六四年四月五日）

甲申四月五日朝鮮使者反于浪華、余與木世粛及子玄、至公館、始見製述書記、通名字。〔中略〕余曰、衲与木弘恭輩、方外莫逆、今日奉謁、亦木氏是由、請少有閑暇、与弘恭等周施一遭幸甚、月、世粛吾所親愛者、相見豈不傾倒。

（甲申〔一七六四年〕四月五日、朝鮮通信使が大坂に戻ってきた。私は木世粛〔木村蒹葭堂〕、子玄とともに通信使の宿舎に行き、初めて製述官や書記と出会い名乗りあった。私が言うに、「私と木弘恭〔木村蒹葭堂〕らとは、世俗を離れた親密な間柄のもので、お目にかかったのもまた木氏によるものです。請うに、少し暇があれば、木弘恭らとともに一度、今日、周旋してもらえるのなら大変ありがたく存じます」。秋月〔南玉〕が言うに、「世粛は私が親愛する人なので、顔を合わせると、心情を吐露することができま

表２　使行録の記録の比較（４月８日～ 19 日）

４月８日	酬唱と応接を禁止、大典が訪れる（元重擧）
９日	周宏、木村蒹葭堂、合離から書簡をもらう（南玉） 周宏が鏡と筆を、西翼が硯十個、韓天壽は木世粛を通して、書簡や賜りを送る（成大中）
10 日	福尚修、木村蒹葭堂、那波師曾、西翼に書簡を送る（南玉）
12 日	周奎が詩札を送り別れの音を伝える（南玉） 周奎が西京に帰るとし、画幅を別れの賜りにする（元重擧）
13 日	周奎が訪れる。木村蒹葭堂から硯一つが送られる（南玉） 木村蒹葭堂から書簡と硯一つ、大典からは手紙と赤い硯二つが送られる（成大中） 周奎が別れを告げる。木村蒹葭堂、合離から書簡が送られる（元重擧） 周宏から書簡で内々の事情を伝えられる（金仁謙）
14 日	周遵が訪れる（南玉）
15 日	合離、木村蒹葭堂、仲尚賢、源文虎の書簡に返事を送る。那波師曾が訪れ談笑を願う（南玉） 周宏、周遵が訪れる（元重擧）
17 日	福尚修、安井屬玉、三宅斌、心縁、知本、周宏、周遵が訪れる（南玉）

す」。）

（大典『萍遇録』一七六四年四月五日）

記録を見る限り、この日、初めて顔を合わせるにもかかわらず、南玉は大典に親近感を持ったように思われる。それは、南玉が言うように、木村蒹葭堂への信頼が厚かったためであった。事件発生後、大典はいったん西京に帰っていたため、『萍遇録』に四月十九日までの記録は残っていない。そこで、『萍遇録』には記されていない四月八日から十九日までの記録を使行録から簡略にまとめた（表２）。

このように、使行録には簡略な記録しか残されていない。だが、『萍遇録』と合わせてみると、依然として蒹葭堂会との交遊が書簡や大典を通して続いていたことがわかる。『萍遇録』の記録は四月二十日から再開される。そこからは「蒹葭雅集図」について本格的な筆談が繰り広げられている。

（四）続けられた交遊、「蒹葭雅集図」の制作へ

まず、四月二十日『萍遇録』の記録から見てみよう。

龍淵曰、向書託世粛、画浪華春暁、及蒹葭雅集、而師及麗王承明輩、或詩或跋、以識其末而恵之、世粛已領諾矣、果已起草、

而師亦有腹稿否、西歸之後、要作萬里顔面、故如是屢言耳、
余曰、圖画一事、世粛及衲輩既領命矣、此固所願也、世粛稍
試粉本、及大旆之未發、必當奉呈
（龍淵〔成大中〕が言うに、「以前の書簡で世粛〔木村蒹葭堂〕に
浪華春曉と蒹葭雅集の画を、師〔大典〕や麗王〔細合半斎〕、承明〔福
原承明〕たちには、詩あるいは、跋文を〔絵巻〕の末に書きしる
してお渡しくださるようお願いしました。世粛はすでに承諾して
くれましたが、はたして草案をすでに描きはじめたのか、また、
僧も心中に考える下書きがあるかどうか〔気になります〕。西に帰つ
た後、遠いところにいてもその顔ぶれを思い起こそうとするため、
このように何度もお聞きします」。私〔大典〕が言うに、「画のこ
とは、世粛と私たちがすでにその命を受け取りました。このこと
は〔私たちも〕強く願うところです。世粛が少しずつその粉本を
試みているので、大旆〔通信使のことか〕が出発する前に間に合
わせて、必ず差し上げます」。）

（大典『萍遇録』一七六四年四月二十日）

使行録には、この日、筆談をした記録は見当たらない。四月
二十日の『萍遇録』に記されている通り、成大中がいつ「蒹葭雅
集図」を依頼する書簡を送っていたのかについては、定かではな
い。だが、先ほどの使行録のまとめからすると、四月十三日に成
大中が木村蒹葭堂に書簡の返信をしたことがわかるため、おそら
くこの日の可能性もあるのだろう。つまり、まだ、事件の犯人が
特定される前である。この日、南玉らが帰国する前までに「蒹葭
雅集図」を完成させると言って大典は、その後、いったん西京に
戻る。その後、五月二日、薬樹（浄土・大典の弟子）から鈴木伝蔵
が処刑され、通信使一行が五月六日に出航することになったこと
を聞いた大典は、そのまま大坂に戻り、五月三日、薬樹とともに
南玉らの宿舎を訪ねる。その日の記録からは、大典が書いた「蒹
葭雅集図」序文に関する筆談が行われたことがわかる。

三日、朝至浪華、余過孝秩、使薬樹去問世粛、既而與薬樹至
公館、〔中略〕龍淵曰、僕雖以私義不得酬和、師之文與筆、其
所愛悦、望為僕作贈行序一通、以作萬里啓面之資如何、余曰、
拙工夫能也、如雅集図序、既已成稿、請賜観正、余懐中出序
文示之、淵讀一遍曰、序文極通暢、可誦、僕既得世粛画、又
得蕉中序、帰装不已重乎
（三日の朝、大坂に着き、孝秩〔片山北海〕のところに立ち寄り、
薬樹を行かせて世粛〔木村蒹葭堂〕の安否を尋ねた。やがて薬樹
とともに公館に到着した。〔中略〕龍淵〔成大中〕が言うに、「私
は私議を理由に酬和することができませんが、僧〔大典〕の文と

筆は愛しんでいます。私のために送別の序を一通作り、それをもって、万里の離れたところにいても、顔を思い起こす材料にしたいのですが、いかがですか」。私が言うに、「〔文を作る〕工夫の才能が拙いのです。雅集図の序なら、すでに原稿を書き上げました。ご覧になり正してくださるよう、お願いします」。私は懐から序文を取り出して見せた。龍淵が一度読んで言うに、「序文は非常に通暢〔滞ることなく貫き通すこと〕して、誦するにいいでしょう。私はすでに世粛の画と蕉中〔大典〕の序文を得れば、帰りの荷物は重くないことがありましょうか」。）

（大典『萍遇録』一七六四年五月三日）

衲雖無似、他日得一上名異域社籍、即不亦生平一大快事哉。

（私は不肖の身ではありますが、後日、異国〔朝鮮〕の社籍〔詩社の名簿〕に自分の名が上がることができれば、それまた、一生一大の快事ではありませんか。）

（大典『萍遇録』一七六四年五月三日）

この記録から見ると、「蒹葭雅集図」の完成よりも先んじて序文が完成していたことがわかる。ここで注目すべきは、大典はその序文の内容を成大中に見せ、意見を反映しようとした点である。成大中がその序文の内容を読み上げた後、非常に満足していることが窺われるが、大典の序文はこの交遊に関する大典自身の感想というより、成大中などが帰国した後、誦するために作られたということが考えられる。続く次の成大中の言葉からも、大典の文を好み、嬉しがる姿さえ見せているのがわかる。さらに、朝鮮の詩社の名簿に自分の名が載ることができれば、一生の快事といった同日の次の記録は、大典の方も南玉らを詩社に加わる「文人」として認識していたことを裏付けるもので、非常に興味深い。繰り返しになるが、まだ殺人事件が一段落していない時期に、彼らの間から雅集図制作の話が持ち出され、朝鮮側の出発が近づくと、完成に向けて意見を交わしていたのである。崔天宗の殺人事件が理由となり大坂に残留することになったとはいえ、朝鮮通信使の役割と大坂の民衆との筆談とは一線を画すものである。両国の文人の立場からしてみればこの期間は、交遊を深める貴重な時間であったのだろう。

大典が手掛けたこの序文については、高橋の研究に詳しい。その内容を見ると、高橋は、序文の後半にある、雖世粛之禮且和乎、苟非國家所與、其能如是乎（世粛〔蒹葭堂〕の礼と和といえども、もしも、国家が〔このような機会を〕与えてくれなければ、可能ではなかった）について、大典がこの交遊を喜ばず、「冷静」に受け取っていると分析し、「徳川の平和」がこのような文雅交流を可能にした前提であると書いた[45]。だが、これまでの道筋からすれば、その

分析は再考の余地がある。確かに、大典が言った通り、この交遊は通信使という国家間の行事によって実現された。その意味からも、本稿は、帰路での交遊のみを検討するのではなく、製述官や書記と日本人との唱和の全体の中から捉える必要があると考え、江戸に向かう前の全体の唱和ぶりを視野に入れて考察してきた。いずれにしても、大典のこの記述からは、国の行事であるにもかかわらず、このような交遊ができたことに、一人の「文人」として、さらにいえば、両国の文人同士の共感のもと、「蘭葭雅集図」が制作されたことに心動かされていたことが窺える。いよいよ「蘭葭雅集図」は、朝鮮通信使が大坂を出発する前日の五月五日に完成し、朝鮮文人の手に渡されることになる。

五日巳下至公館、是日蘭葭集図巻既成、世粛画之、題詩其後者七人、爲孝秩、麗王、承明、子琴、公翼、藥樹、主人世粛、末有余序云、博蔵記文亦得寫全、倶使藥樹携之、詣製述書記房、秋月正寝、藥樹揺学、既而龍淵、玄川亦聚、相與怡々、乃出雅集巻之、余曰、世粛多々至言、此一図急卒寫上、褙装亦不精好、恐不能中高意、龍淵及秋玄披覧忻然、藥樹自傍略指示其人物

（五日の十一時頃、公館に到着した。この日蘭葭集図の絵巻が完成した。世粛〔蘭葭堂〕が画を手掛け、題詩したのは次の七人で、孝秩〔片山北海〕、麗王〔細合斗南〕、承明〔福原承明〕、子琴〔葛子琴〕、公翼〔岡公翼〕、藥樹〔浄王〕、蘭葭堂の主人である世粛〔木村蘭葭堂〕と、最後に私が書いた序文がある。鈴木伝蔵の記文も完成したので薬樹にすべてを持ってこさせた。製述官や書記の部屋に至ると、秋月〔南玉〕がちょうど寝ていて、薬樹がゆすって起こした。龍淵〔成大中〕と玄川〔元重擧〕も集まり、互いに喜んだ。雅集図の巻を取り出して私が言った。「世粛が何度も、この図は急いで描いたうえ、表装もまた、できばえが美しくなく、おそらくは〔皆さんの〕心に適わないのだろう、と言っていました」。龍淵と秋月、玄川が〔雅集図を〕観て喜んだ。薬樹がその隣で人物を指しながら大略な説明をした。）

（大典『萍遇録』一七六四年五月五日）

この記録によれば、順番に片山北海、細合斗南、福原承明、葛子琴、岡公翼、浄王、蘭葭堂と巻末に序文を書いたという大典を含め、総勢八人が雅集図の巻に詩文などを寄せている。この面々は、蘭葭堂会の一員でありながら、後に片山北海が盟主を務める混沌詩社に参加する顔ぶれでもあるという[46]。ここで注目すべきは、朝鮮側の方も、成大中だけでなく、南玉、元重擧が「蘭葭雅集図」の完成を歓迎している点である。「蘭葭雅集図」については、成大中以外の他の人物が制作過程に加わっていた可能性はほとんど論

図１　『蒹葭雅集図』（32.5㎝× 413.5㎝、韓国国立中央博物館所蔵）

じられてこなかった。だが、前記の記録からすると、南玉や元重擧などが「蒹葭雅集図」制作について事前に知っており、その完成を楽しみにしていたといえるのだろう。

ここで図１の「蒹葭雅集図」を見てみよう。

記録にもあるように、薬樹が絵の中の人物について説明したとされているが、実は、「蒹葭雅集図」の中に描かれている人の数は、絵巻に詩文を寄せた人の数より一名多い。それは、一月の大坂から南玉らと使行に随伴した儒者・那波魯堂（一七二七～一七八九・名は師曾、字は孝卿、通称は主膳）であるといわれる。那波魯堂は絵巻に詩文を添えていないが、雅集図の中には描かれている。その経緯について金文京は、成大中の要請によって那波魯堂の姿を後から描き加えたのではないか、と指摘している。[47] 確かに、『萍遇録』の中にも、宿舎への出入りが制限されたため、那波魯堂と顔を合わせられないことを惜しんだ成大中と大典の筆談が見られる。大典の序文と同様、画の中にも成大中の意見が反映されていた可能性が示唆されるだろう。この期間のことについて、使行録からは簡略な記述を確認することができる（表３）。

このような記録の内容が暗示することは、「蒹葭雅集図」が、成大中一人の依頼によって制作されたもの、と必ずしも言い切れないということである。この点は、この記録に頼るほかないが、十分考察の余地があるといえるだろう。

表３　使行録の記録の比較（５月３日～５日）

５月３日	大典と藥樹が来て談笑をした（成大中、元重擧）
４日	大典と周宏が来て、崔天宗殺人事件のことで話をし、大典に事件の全貌をまとめた文をもとめる（元重擧） 大典、藥樹が終日来ていた（成大中、南玉）
５日	大典が事件について書いた文を持ってきた。残っている紙や筆、団扇を大典、藥樹、大典、合離、木村蒹葭堂、副常修にあげた（元重擧） 大典、藥樹が終日来ていた（成大中、南玉）

以上のように、南玉ら、「庶擘文人」と蒹葭堂会の人々がどのようにして交遊し、「蒹葭雅集図」が制作されるに至ったのかについて考察してきた。概観の通り、とりわけ、崔天宗殺人事件の発生後は、朝鮮側と日本側の記録にはかなりの相違が見られた。その理由として、使行録には、その性質上、次回の使行団への参考資料という機能があることを挙げたい。すなわち、公の出来事が優先的に記載されているのである。したがって、一七六四年の交遊については、使行録と『萍遇録』、いずれの記録を見ることによって、その実態を確認することができるのである。さらに、この交遊の産物ともいえる「蒹葭雅集図」に関して、両方による「共作」の可能性が秘められているのならば、限定的な解釈として蒹葭堂会への憧れをその前提とした先行研究の見方と一線を画すものと考えられる。

おわりに

以上のように、一七六四年、朝鮮通信使の製述官や書記として日本に赴いた南玉をはじめとする「庶擘文人」と、蒹葭堂会との交遊を再考察した。本稿では、交遊そのものだけに焦点を当てるのではなく、通信使としての役割も視野に入れつつ、さらに、通信使に参加する前にまでさかのぼって考察を進めた。そのため、第一章では、なぜ、庶擘という身分に目を向けるべきなのかについて検討した。さらに、第二章では、交遊や「蒹葭雅集図」の制作の過程について記録の比較分析を通して、多角的な観点から考察した。

このような考察を通して、南玉らが朝鮮通信使に参加する以前からすでに、詩社など、多様な人々と交遊を行い、「庶擘文人」の一面を有していたことが明らかになった。さらに、日本の研究において今までほとんど注目されることのなかった、庶擘という朝鮮社会の特殊な身分に光を当てることで、庶擘と朝鮮通信使との関係性についても概観することができた。「庶擘文人」の考察は、

今後、朝鮮通信使だけでなく、朝鮮社会における多様な「文人」の有様を比較考察する上でも重要な意義を持つと考えられる。一七六四年の通信使行は、おびただしい唱和や殺人事件の発生など、最初に引用した三宅英利の指摘のように、使行のすべてを尽くしたと評価されてきた。本稿は、なかでも、国家間の行事さえ乗り越え、両国文人の共感によって行われたこの交遊に注目した。この交遊は、一七六四年の使行を評価する上でも、重要な意味合いを含んでいると考える。それを可能にした一因は、言うまでもなく、朝鮮側の「庶擘文人」と、蒹葭堂会の多様な層の文人たちの文人志向が重なり合ったことに依拠するといえよう。

今後、「蒹葭雅集図」の持つ意義については、依然としてより横断的な考察が必要であると考えられる。その意味で、十七世紀以後、朝鮮の文人社会において顕著となる文人の集いやそれを画にした雅集図の制作過程の考察を視野に入れながら、「蒹葭雅集図」との関わりや意味合いについて明らかにすることを今後の課題としたい。間もなく近代という大きな変化の波に巻き込まれる朝鮮と日本社会を生きた「文人」の有様を明らかにするよう、さらなる考察を行っていきたい。

注

（1）一八一一年に実現した十二回目朝鮮通信使行は、天明飢饉など財政難を理由に、対馬での聘礼交換（易地聘礼）にとどまった。一方、一七六四年の朝鮮通信使行については、朝鮮の二十一代国王、英祖において二回目の使行であった。一七六四年の通信使は約四八〇人規模の使行団で、一行は一七六三年八月三日、漢陽（ハンヤン）を出発し、十月に釜山を出航して一七六四年一月二十一日、大坂入りをした。その後、西京を経由し二月十六日に江戸に入った。三月十一日、江戸を出発した使行団が朝鮮に戻り、七月八日に国王の前で復命するまで三二二日かかった。李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、一九九七年、なお、本稿における日付はすべて旧暦。以下についても同様。

（2）三宅英利『近世の日本と朝鮮』講談社、二〇〇六年、一一一～一一二頁。主には、使臣編成の際に、任命された人物が何度も変更されたことや、釜山を出港した後、船が破損する事故が発生、何より、帰路の大坂での通信使の一員・崔天宗が対馬の訳官・鈴木伝蔵によって殺害される惨事が起きたことなどが挙げられる。

（3）朴賛基『江戸時代の朝鮮通信使と日本文学』臨川書店、二〇〇六年、一一頁。そのほか、朝鮮通信使に関する主な日本の先行研究は、以下の通りである。三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、一九八六年。『近世アジアの日本と朝鮮半島』朝日新聞社、一九九三年。李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、一九九七年。同『朝鮮通信使と日本人』学生社、一九九二年。朴賛基『江戸時代の朝鮮通信使と日本文学』臨川書店、二〇〇六年。辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使――善隣と友好の記録』明石書店、一九九三～一九九六年。鄭章植『使行録に見る朝鮮通信使の日本観――江戸時代の日朝関係』明石書店、二〇〇六年。仲尾宏『朝鮮通信使をよみなおす――「鎖国」史観を越えて』明石書店、二〇〇六年。なお、韓国の先行研究には、구지현（グジヒョン）「1763년 필담창화

를 통해 본 조선과 일본의 시문창화 인식 변화（一七六三年筆談唱和を通して見る朝鮮と日本の詩文唱和の認識の変化）」『동아시아 문화연구』四十九号、二〇一一年、六八～九一頁、김성진（キムソンジン）「南玉の生涯와 日本에서의 筆談唱和」『한국한문학연구』十九号、一九九六年、二七三～三〇〇頁、同「癸未使行時의 筆談唱和와 大阪의 混沌社」『한국문학논총』五十四号、二〇一〇年、五～四三頁、同「계미사행단（癸未使行團）의 대판체류기록（大阪滯留記録）과 대전선사（大典禪師）촉상（竺常）」『동아시아 문화연구』四十九号、二〇一一年、一四九～一八三頁、정장식（ジョンジャンシク）「英祖代 通信使와 李德懋의 日本 研究」『일본문화학보』二十三号、二〇〇四年、二〇五～二二九頁、などがある。

（4） この点については、高橋博巳「통신사·북학파·켄카도（兼葭堂）（通信使·北学派·兼葭堂）」『朝鮮通信使研究』四号、二〇〇七年、一二三～一四四頁、同『東アジアの文芸共和国――通信使·北学派·兼葭堂』新典社、二〇〇九年、同「ソウルに伝えられた江戸文人の詩文――東アジア学芸共和国への助走」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、二〇一一年、四九一～五〇一頁、同「通信使行から学芸の共和国へ」染谷智幸·崔官編『日本近世文学と朝鮮』勉誠出版、二〇一三年、六二～八三頁、同「文人研究から学芸の共和国へ」『二松学舎大学人文論叢』九十三号、二〇一四年、一～一八頁、などに詳しい。

（5） 안대회（アンデフェ）『18세기 한국한시사연구（十八世紀韓国漢詩史研究）』소명출판、二〇一二年、七三九～七四三頁。

（6） この表現については、高橋博巳、前掲注（4）「통신사·북학파·켄카도（兼葭堂）（通信使·北学派·兼葭堂）」、一一八頁や、『東アジアの文芸共和国』に詳しい。ただ、その後発表された論考においては、「東アジア学芸共和国」と表現される場合もある。

（7） 朝鮮側の人物について高橋博巳は、「元重挙――特立独行の人」『金城学院大学論集』六（二）号、二〇一〇年、二二八～二五八頁および「成大中の肖像――正使書記から中隠へ」『金城学院大学論集』五（一）号、二〇〇八年、四〇～五〇頁の中で一七六四年の書記·元重挙と成大中について論じているが、例えば、彼らの身分や、通信使として派遣される以前については、ほとんど論じられていない。

（8） 木村兼葭堂と兼葭堂会については、中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社、二〇〇〇年に詳しい。二六八～二七二頁で、木村兼葭堂と朝鮮通信使との交流について言及しているが、木村兼葭堂が使行中の学者たちの訪問を受けたと指摘しており、この部分は、再考の余地があると思われる。概観する限り、製述官や書記が宿舎を離れたことは確認できない。このほかの主な参照は、大阪歴史博物館『木村兼葭堂――なにわ知の巨人、特別展没後二〇〇年記念』思文閣出版、二〇〇三年、水田紀久『水の中央に在り――木村兼葭堂研究』岩波書店、二〇〇二年など。

（9） 「兼葭雅集図」は、二〇一二年、金文京によってその所在が明らかになったため、それ以前の先行研究においては、画に関する分析はほとんど見られない。金文京「『萍遇録』と「兼葭堂雅集圖」――十八世紀末日朝交流の一側面」『東方学』一二四号、二〇一二年、一～一九頁、同『18세기 일본 지식인 조선을엿보다――평우록（萍遇録）』成均館大学出版、二〇一三年。筆者は、二〇一二年の七月に「兼葭雅集図」の所蔵先である韓国国立中央図書館にて、研究資料として使用許可を得た。

（10） 日本における朝鮮の庶孽（ソオル：庶子）に関する先行研究はほとんど見当たらないが、ロビンソン·ケネス「朴趾源の「両班伝」に見る朝鮮社会の身分構造のパロディ（続·パロディと日本文化）」『アジア文化研究別冊』十八号、二〇一〇年、一〇九～一一三頁の中で、庶孽について言及している。

（11） 本稿で引用する大典の『萍遇録』は、韓国国立中央図書館所蔵の筆写本である。そのほかに、建仁寺両足院所蔵本、日本国会図書館所蔵本、東京大学史料編纂所蔵本、静嘉堂文庫所蔵本、内閣文庫所蔵本、駒沢大

学所蔵本などがある。なお、金文京、前掲注（9）『18세기 일본 지식인 조선을엿보다』は『萍遇録』の韓国語版として刊行されたものである。

（12）例えば、前掲注（3）の日本の先行研究の場合でもほとんどが、趙曮の『海槎日記』を資料としている。

（13）三宅英利、前掲注（2）、二二三～二二四頁。

（14）韓国学中央研究院の『韓国民族文化大百科』より。特記のない朝鮮社会の制度などについては、『韓国民族文化大百科』を参照。

（15）김경용（キムキョンヨン）「조선시대 과거제도와 서얼차대（朝鮮時代の科挙制度と庶擘差待）」『교육사학연구』九号、一九九九年、五五頁。

（16）김경숙（キムキョンスク）「서얼 문학의 위상（庶擘文学の位相）」『고전문학연구』二十九号、二〇〇六年、一四一頁。

（17）안대회（アンデフェ）「서얼시인의 계보와 시의 사적 전개（庶擘詩人の系譜と詩の史的展開）」『문학과 사회집단』韓国古典文学会、一九九五年、二六五頁。

（18）これについては、박균섭（パクキュンソップ）「서얼 지식인의 앎과 삶（庶擘知識人の知と人生）」『인격교육』八号、二〇一四年、四三～六〇頁を参照。

（19）朝鮮時代には「品階」によって地位と役割が決まっていた。主に正・従一品から正・従九品まで、およそ十八階級に区分されていた。『韓国古典用語辞典』。

（20）丁若鏞「人材策」『茶山詩文集』巻三、同「庶擘論」『茶山詩文集』巻十二、朴趾源「擬請疏通疏」『燕巖集』巻三、韓国古典翻訳院。なお、朝鮮後期の代表的なハングル小説『洪吉童（ホンギルドン）伝』は、庶擘の差別を題材にした作品である。

（21）成大中の家を「名門」庶擘家と唱えたのは、손혜리（ソンヘリ）「과거를 통해 본 조선후기 서얼가의 學知생성과 家學의 성립（科挙から見る朝鮮後期庶擘家の学知の生成と家学の成立）」『대동한문학회지』三十八号、二〇一三年、一六七頁。

（22）李元植、前掲注（1）、四～五頁。

（23）ここで唯一例外となるのが、一七四八年の製述官・朴敬行（パクキョンヘン）で、中人の身分であったという。それ以外の一六八二年から一八一一年の間、派遣された製述官や書記は、全員庶擘の身分であった。『幷世才彦録』の朴敬行に関する記録を見ると、「有朴景行、京城閭巷人〔朴景（敬）行は、京城の閭巷（中人層を指す言葉）人である〕」と記されている。製述官や書記の身分については、김경숙（キムキョンスク）「18세기 朝鮮通信使 製述官 및 書記의 文學世界」『온지논총』一号、一九九五年、一一二～一一六頁に詳しい。

（24）김경숙（キムキョンスク）、前掲注（16）、一五九頁。

（25）『韓国歴代人物総合情報』韓国学中央研究院、안대회（アンデフェ）、前掲注（5）、一〇七九～一〇八〇頁。南玉の生涯については、김성진（キムソンジン）、前掲注（3）、「南玉의 生涯와 日本에서의 筆談唱和」、二七三～三〇〇頁、김보경（キムボギョン）「남옥（南玉）의『일관기（日觀記）』연구（南玉の『日観記』研究）」『한국고전연구』十四号、二〇〇六年、二四五～二七七頁に詳しい。

（26）柳得恭『古芸堂筆記』巻五、「補破詩匠」。

（27）김보경（キムボギョン）、前掲注（25）、二四九～二五〇頁、김성진（キムソンジン）、前掲注（3）、「南玉의 生涯와 日本에서의 筆談唱和」、二七七～二七八頁。

（28）李鳳煥家と南玉、李鳳煥との交遊については、신익철（シンイクチョル）「18세기 중반 초림체（椒林體）한시（漢詩）의 형성과 특징 —— 이봉환을 중심으로（十八世紀半ば、椒林體漢詩の形成と特徴——李鳳煥を中心に）」『고전문학연구』十九号、二〇〇一年、三五～六五頁、김영진（キムヨンジン）「조선후기 사대부의 야담 창작과 향우의 일양상——盧命欽、盧兢父子와 豊産 洪鳳漢家와의 관계를 中心으로（朝鮮後期士大夫の野談創作と

郷友の一様相――盧命欽・盧兢父子と豊産・洪鳳漢家との関係を中心に」『어문논집』三十七号、一九九八年、二一～四五頁に詳しい。

(29) 洪稷榮『小洲集』巻五十三、「再從兄三鹿隱先生墓誌銘」。

(30) 沈慶昊「黨伐의 場에 핀 梅花 趙載浩와『梅社五詠』」『韓国漢詩研究』四号、一九九六年、三五一～三五四頁。

(31) 『韓国民族文化大百科辞典』韓国学中央研究院、안대회（アンデフェ）、前掲注（5）、六六三～六六九頁。成大中の生涯については、손혜리（ソンヘリ）、前掲注（21）、김문식（キムムンシク）「성대중의 가계와 교유 인물（成大中の家系と交友人物）」『문헌과 해석』二十二号、二〇〇三年、一六四～一七七頁に詳しい。

(32) 손혜리（ソンヘリ）、前掲注（21）、一八一～一八四頁。

(33) 「北学派」の文人志向に注目した研究者に李佑成がいる。李佑成は、庶擘文人知識層と漢陽という都市との関わりを強調し、「北学派」を「연암그룹（燕巖グループ）」と初めて称した。以後、韓国の国文学研究においては、「北学派」に代わって、燕巖グループ、燕巖派と称する場合がある。「燕巖」は先述のように、小説『両班傳』や自身の著書『燕巖集』などを通して庶擘への差別を批判してきた朴趾源の号である。李佑成「実学派의 文学――朴燕岩의 경우」『国語国文学』十六号、一九五七年、三二頁。

(34) 李徳懋の日本観に元重擧や成大中の影響が及んでいることは、すでに、先行研究で多々論じられてきた。河宇鳳著、井上厚史訳『朝鮮実学者の見た近世日本』ぺりかん社、二〇一一年、허경진（ホキョンジン）「이덕무의 일본 한시 수집 경로와 서술방식（李徳懋の日本漢詩収集経路と書術方式）」『동북아문화연구』二十四号、二〇一〇年、九三～一一三頁、정장식（ジョンジャンシク）「英祖代 通信使와 李徳懋의 日本 研究」『일본문화학보』二十三号、二〇〇四年、二〇五～二二九頁、박희병（パクヒビョン）「조선의 일본학 성립――원중거와 이덕무（朝鮮の日本学設立――元重擧、李徳懋を中心に）」『한국문화』六十一号、二〇一三年、一七九～二一九頁など。

(35) 『韓国歴代人物総合情報』韓国学中央研究院、안대회（アンデフェ）、前掲注（5）、七三七～七三九頁、박희병（パクヒビョン）、前掲注（34）に詳しい。

(36) 『韓国民族文化大百科辞典』韓国学中央研究院、민덕기（ミンドックキ）「김인겸의『日東壯遊歌』로 보는 對日 인식――조엄의『海사日記』와의 비교를 통해（金仁謙の『日東壯遊歌』からみる対日認識――趙曮の『海槎日記』との比較を通して）」『한일관계사연구』二十三号、二〇〇五年、三九～七二頁に詳しい。

(37) 안대회（アンデフェ）、前掲注（5）、一〇五七～一〇五九頁。

(38) 主な使行録としては、製述官、南玉の『日観記』、書記、成大中の『日本録』、書記、元重擧の『乗槎録』『和國志』、書記、金仁謙の『日東壯遊歌』などが挙げられる。なかでも金仁謙の『日東壯遊歌』はハングルで書かれたものである。

(39) 仲尾宏『朝鮮通信使の足跡――日朝関係史論』明石書店、二〇一一年、一八八頁。

(40) 「総記」の頁目は以下の通りである。（領土、山や水、皇系、源系、官制、税、軍事制度、資源、宮室、神仏、学術、文章、書画、医薬、刑罰と尋問、関門の禁止、火の防備、服、食べ物、船、女色、冠婚葬祭、日本語の音と訳、農業）。

(41) 有坂道子「都市文人」横田冬彦編『知識と学問をになう人びと』吉川弘文館、二〇〇七年、一四四～一四五頁。

(42) 金仁謙の『日東壯遊歌』は、先述のように、ハングルで書かれたものである。本稿での引用は、邦訳、高島淑郎訳注『日東壯遊歌――ハングルでつづる朝鮮通信使の記録』平凡社、一九九九年による。

(43) これについては、大阪歴史博物館、前掲注（8）、二八～二九頁に詳しい。

(44) 辛基秀「「唐人殺し」と歌舞伎」辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使

――善隣と友好の記録』七号、一九九三～一九九六年、一〇六～一〇九頁、山本秀樹「事実と巷談書留――「唐人殺し」の実話の場合」説話と説話文学の会『説話の近世的変容』清文堂、二〇〇一年、一六三～二一五頁などを参照。

(45) 高橋博巳、前掲注（4）「통신사·북학파·켄카도（兼葭堂）（通信使・北学派・兼葭堂）」、一二六～一二七頁、同「通信使行から学芸の共和国へ」『二松学舎大学人文論叢』九十三号、二〇一四年、六四頁。

(46) 김성진（キムソンジン）「癸未使行時의 筆談唱和와 大阪의 混沌社」『한국문학논총』五十四号、二〇一〇年、五～四三頁。김성진（キムソンジン）は、片山北海を盟主とする混沌詩社の設立に、一七六四年のこの交遊が深く影響を与えたと唱えた。

(47) 金文京、前掲注（9）『18세기 일본 지식인 조선을엿보다――평우록（萍遇録）』、六四～六七頁。

付記

原文引用の表記は、原文の旧字体に従い、句読点などは筆者による（ただし、『萍遇録』は原文による）。

引用原文の出典

『朝鮮王朝実録』韓国国史編纂委員会所蔵
南玉『日観記』韓国国立中央図書館所蔵、筆写本
成大中『日本録』高麗大学図書館所蔵、筆写本
成大中『青城雑記』韓国古典翻訳院所蔵
元重挙『乗槎録』高麗大学図書館所蔵、筆写本
大典『萍遇録』韓国国立中央図書館所蔵、筆写本
李徳懋『青荘館全書』韓国古典翻訳院所蔵
趙曮『海槎日記』韓国古典翻訳院所蔵
洪稷榮『小洲集』延世大学図書館所蔵、筆写本
柳得恭『古芸堂筆記』東京大学図書館所蔵、影印本
李奎象『幷世才彦録』韓国国立中央図書館所蔵、筆写本